

# 日本看護歴史学会

## 会報

日本看護歴史学会  
第16号  
1993年10月10日

### — 新しい看護職の

### 歴史の創造へ向けて —

草刈 淳子

去る八月二八日(土)、二九日

(日)の両日、神戸市の勤労会館で第七回大会が盛会裡に開催された。本年は、明治七年八月一八日にわが国初の医療関係法として「医制」が制定されてから、一〇年目の年にあたる。この「医制」の第五〇条から五二条に「産婆」が規定されていたことから、今大会は「医制一〇〇年『産婆制度を考へる』」のテーマでなされたわけである。関西地区の関係者の熱意ある呼掛けもあって、助産婦の出席が多く、出席者は一三〇人を越えた。特に開業助産婦歴五〇年という、助産婦の歴史の「生き証人」ともいえる先輩の方々の存在

が一際目だった。

高橋みや子氏の基調講演および女性学の立場からの大林道子氏の記念講演によって、助産婦が歩んで来た歴史を、過去の「産婆」誕生の医制制定時から見直し、さらに現代社会の急速な変化への対応としてのこれからの助産婦のあり方を探る上で、またと無い機会となったともいえよう。

これは、本学会が七回目を迎えるまでになり、また、現在の看護職が置かれている状況とも重なって、歴史への関心が、単に過去の資料についての研究に留まらず、現在に至る経緯を踏まえて、さらに、これからのあり方を主体的に

とらえる、「歴史をみる目」が育ちつつあることを窺わせる・・・とみるのは早計であろうか？

本学会の第二回大会は、実質的な研究活動の第一歩をあゆみだした年であった。シンポジウム「戦後の看護を語る」のシンポジストの一人として看護管理学の立場から発言させて頂く貴重な機会を与えられ、戦後の看護の歩みを改めて通観してみても、これまでの看護の歴史が、いかに「作られた歴史」であったかを思い知らされた。折しも昭和六三年は、日本の医療が、保健・医療からさらに福祉も連携し大きく転換した年でもあった。

ここ数年の世界の変化は目まぐるしく、国内においても与野党逆転が起こるなど、歴史の大転換が日常的ともいえる程に展開されている。時代の転換がもたらす世界的な潮流なのであるうか？

こうした社会の変貌を反映して、医療界もようやく、長年の「医師中心」のあり方から、「患者中心」の医療へと動きだしたかにみえる。看護界で「患者中心の看護」が云われ始めたのは、一九六〇年代ですでに三〇年前のことであるが。

昨年の医療法第二次大改正により、四五年ぶりに医療施設の機能

分類がなされた。まだ現実に動きだしていないとはいえず、看護はこれからのような変貌をとげるのであるうか？

本年二月中旬、社会保障制度審議会の将来像委員会の第一次報告がなされた。歴史的に日本の社会保障は、貧困者を救済する公的扶助として発展してきた。その推進の基本原則は、普遍性、公平性、有効性、総合性、権利性であった。しかし、医療や福祉のサービスについて「公的責任」のあり方をめぐって、個人や家族の私的責任という新たな視点から問いなおされている。

こうした面からみても、日本の医療は、すでに第一発展段階を終え、明らかに質的に異なる第二段階へと確実に歩みだしている。

過日、戦後の日本の看護を推進してきた国立東京第一病院のほぼ五〇年にわたる「看護のあゆみ」が出されたが、今日、大多数の施設の看護組織の成員は、戦後の新制度教育を受けた看護婦によって構成されるに至り、新しい看護婦像を自ら創造していける時代が到来したともいえる。

この度の医制一〇〇年を契機として、看護婦の「作られた歴史」から「創り出す」歴史への転換点

(八頁上段へ)

第七回総会報告

亀山 美知子

去る八月二八日、本会の第七回総会が神戸市勤労会館で開催された。前年度の活動報告の詳細は省略するが、発行が一年より遅れていた本会機関誌『日本看護歴史学会誌』第六号は、諸般の事情により今総会直前に刊行された。発行人日の大福な遅れについては心よりお詫びする次第である。

一、本年度活動方針

すでに三年前より、本会は看護歴史研究に関する基礎の確立を目指すべく、講演等を準備する一方で、日常の研究活動の推進に努めてきた。

現在の看護界の現状は、将来的には希望のもてる状況といえなくもないが、反面、教育の現場を中心として業績づくりのみ奔走するといった憂えるべき状況もうかがえる。この中において、本会は今後とも研究者としてのマナーも含めた、より高い資質の開発を目指すことを活動方針の主眼とする。

尚、本年八月一日には関西初の学習会を実施したが、今後、各地でも同様の活動の実現をめざしたい。

一、本年度事業計画

前述のとおり、学習会等の準備を働きかけることと共に、第七回大会のテーマである「医制一〇〇年―産婆制度を考える」に基き日本でも最初の医療制度として「医制」が明治七年（一八七四）八月一八日に発布されたことに伴う、産婆一〇〇年を記念する講演等を準備した。

又、すでに予告したとおり、記念テレカを作製し、広く社会へのPRを行なうものとする。

尚、第七回大会には、日本助産婦会兵庫支部・同大阪府支部、社団法人京都府看護協会、兵庫県下の各教務主任会の御協力を得たことをここに深く感謝する。

◆新幹事の承認と

役割分担決定される

- 代表幹事 亀山美知子  
 会計 依田和美、大平政子  
 事務局 草刈淳子、鶴沢陽子  
 分科会 高田節子、五十嵐節  
 渉外 高橋みや子  
 学会誌担当 玄田公子、亀山美知子、岡山寧子（他に会員中より、吉川龍子留、神永恂子の両氏が編集委員として選出された。）

日本看護歴史学会 1993年度予算案

収入の部 (単位 円)			
項目	予算額	摘要	前年度決算額
前年度繰り越し金	792,417		919,163
会費	600,000	150名×4,000	544,000
寄付金その他	10,000		31,152
合計	1,402,417		1,494,315

支出の部 (単位 円)			
項目	予算額	摘要	前年度決算額
事務経費	200,000		192,244
印刷費	(40,000)		(8,081)
通信費	(150,000)	会報3回 学会誌1回	(181,283)
その他	(10,000)		(2,880)
幹事会開催費	150,000		118,700
出版費	300,000		82,400
会報発行費	(100,000)	年3回	(82,400)
学会誌発行費	(200,000)	年1回	(0)
会員名簿費	0	1回/3年	30,900
総会費	50,000		50,000
分科会費	20,000		1,054
予備費	562,417	前年度学会誌発行費非執行分を含む	226,600
合計	1,402,417		701,898

日本看護歴史学会 1992年度会計報告

収入の部 (単位 円)			
項目	予算額	決算額	差し引き額
前年度繰り越し金	919,163	919,163	0
会費	600,000	544,000 会員95名 新入会員16名	▲ 56,000
寄付金その他	10,000	31,152 会誌等売上 (18,395) 広告料 (5,000) 利息 (7,757)	21,152
合計	1,529,163	1,494,315	▲ 34,848

支出の部 (単位 円)			
項目	予算額	決算額	差し引き額
事務経費	220,000	192,244	27,756
印刷費	(50,000)	(8,081)	
通信費	(150,000)	(181,283)	
事務用品費	(20,000)	(2,880)	
幹事会開催費	100,000	118,700	▲ 18,700
出版費	300,000	82,400	217,600
会費発行費	(100,000)	(82,400)	
		13号 30,900 14号 30,900 15号 20,600	
学会誌発行費	(200,000)	(0)	
会員名簿費	30,000	30,900	▲ 900
総会費	50,000	50,000	0
分科会費	20,000	1,054	18,946
予備費	809,163	226,600 学会誌5号印刷費	582,563
合計	1,529,163	701,898	792,417

次年度への繰り越し額  
 収入額 1,494,315円 - 支出額 701,898円 = 792,417円

(会計 依田和美)

## 分科会報告

五十嵐 節

第七会分科会は、八分科会が開かれ活発な意見交換がされました。

一、ナイチンゲールの我が国への

受容 話題提供 吉川龍子

参加者七名 昭和七年米國看護婦の書いた①「衛生改良家並に衛生学者としてのフローレンス・ナイチンゲール」②「book of short of history」が日赤の看護婦により訳され看護学生に供されていた。この二つの史料が同時に日本に紹介された背景、日本では既に公衆衛生看護婦の養成があることとの関連か史料の背景史料を検索する必要がある。また、教育の流れがナイチンゲール英↓米↓日本という現象に興味を探ること必要などの意見交換があった。

二、日赤看護婦外国留学第一号

田淵まさ代

話題提供者 高田節子

参加者三名 明治一八年岡山県の田舎に生まれ女学校を卒業日赤

に三年学び、大正一〇年ロンドンの「ベットフォード・カレッジ」第二回国際公衆衛生看護講習会に六カ月の留学、大正一〇年日本赤十字社看護婦外国語養成がはじまった。臨場感のある個人史。

三、戦後の看護教育制度改革による新制度の看護教育がいかに実現したか、その周辺事情を探る。

話題提供者 武藤美知・岸本多恵子 参加者七名

日本の看護教育制度の改革は、第二次大戦の敗北とGHQの指導によらなければならなかった新制度看護教育は①教育のありかたに關するモデル校づくり②看護教師のための養成講習会の発足③臨床看護婦の再教育の発足④病院管理の近代化への模索等の新制度看護教育を発足するために立ちはだかる諸問題をどのようにしてクリアしてきたかを探ることと今日の問題の理解につながる。

四、兵庫県における看護婦の歴史 話題提供者 山崎雅代・前田たまえ 参加者八名

①兵庫県における明治から昭和初期までの看護婦学校をあげた②史料が残されていない、史料はあるが得にくい学校をあげ、③史料の収集方法について意見交換した。

五、『助産の棗』の助産婦教育上の役割 話題提供者 内藤直子 日隈ふみ子 参加者七名

緒方正清が助産婦教育にどんな役割をしていたか一五七五号まで実在している貴重な資料「助産の棗」を実際に見た上での提供である。助産婦によって投稿されている実践事例をのせている。緒方はなぜ助産婦教育に力をいれたのか産科医の地位か、富国強兵による墮胎などの防止か緒方の保健指導の重要性などについて話があった。

六、家族制度が「子産み」にもたらした影響の歴史的変遷について 法政史の立場より 話題提供者 穂村郁代 参加者五名

法的に時代を律令、幕藩法、明治民法、民法の5つに分け律令まではむこ取り婚、以後はよめ取り

婚で、妻をめとるのは子孫相続、明治民法からは、富国強兵「子産み」は女性に対する最大の社会的評価としている等、時代調査をするなかで不妊の女性へ産婆のかかわりが記録にない。産婆の聞き取り調査の必要があるなど話があった。

七、文学・映像にみる看護 看護史のテーマ・史料探しへの情報提供 話題提供者 五十嵐節 参加者六名

医療社会史研究家 新村拓氏の著書五編を紹介、その膨大な史料は整理された辞書をみるごときである。文学のみならずいづれの領域でもその時代に生活する人間の生・老・病・死・ホスピスなどの研究に關連の史料を探するときの参考ともなる。

八、律令制度の中に見る看護 話題提供者 板倉勲子・細見明代・岡田麗江 参加者六名

①医疾令にみる女医について ②穢と出産の穢・月事の忌避の關係について報告がされた。看護のルーツが女医からの発生が未だ不明。女性差別か女性史・民俗学とかの視点から研究がなされる必要があるなどの意見交換がなされた。

## トラウベと産婆

廣瀬 ミエ子

(長野市・非会員)

「女と男がこの世にいる限り、トラウベと助産婦という職業は存在するし、必要である。」助産婦になって、いきついた気持がこれでした。数年前より「助産婦」にこだわりを強めていたところ、第七回の学会が助産婦・産婆特集となっていたので参加させていただきました。

私は常々、温故知新の言葉を大切に思っています。一日目の高橋みや子氏、大林道子氏の講演は以前から一度は聞きたいと思っていたので、大変勉強になりました。私は七年程前、長野県のある地区の産婆の足跡を文集として作る作業を行ないました。このお二人の講演をもっと早くにお聞きしていれば、もっともっと深く歴史の追求調査ができ、記録として残せたのに//と悔まれます。

長野に帰ってきて早速、お二人の講演テープをダビングして友人に配りました。これが、今の私にできる行動のひとつではないかと

考えたからです。

そして二日目、私にとっては思わぬ収穫がありました。それは「家族制度が『子産み』にもたらした影響の歴史の変遷について」を研究して発表された穂村郁代氏の分科会に参加させていただいたことです。今まで産婆を語る時、お産と産婆としての視点しか持っていなかった自分を発見できたこと。どうして今まで、不妊と産婆のかかわりに気がつかなかったのだろう。そのことに気づき、問題としてとり上げ研究として取り組み、私に歴史に広い視野を提供していただいた穂村郁代氏に心から感謝申し上げます。

日本看護歴史学会に初めて参加させていただき、まず驚いたことは、その学会に参加しているすべての皆さんの目線の高さを同じにされていたことです。これはすごく親しみを感じる事ができました。そしてさりげなく、すぐく内容の濃いものであったということです。この学会を通してまた、交流を深めることができた事を大変うれしく思います。

唯ひとつ心のこりは、医制二〇年の記念テレカを数枚しか買わなかったこと。もう少し多く買ってくればよかったなあ、残念!

## 再考を決意

柏倉 マサ子

(神戸市・非会員)

(資料を集めて語らしめる)大林先生が申されました。理念とそのエネルギーに感動致しました。

助産婦を取りまく諸情勢は一段と厳しさを増しています。高齢者人口の増加や在宅ケアの充実のために看護が脚光を浴びて、国を揚げ当面の施策に取り組まれていきます。そうした状況の中にありながら二一世紀を支える母と子。その家族の健康を守るための援助者である助産婦については注目すべき動向はありません。

戦後の制度の切換えによってできた断層を埋めて助産婦本来の、よい仕事が出来る条件を整えなければならぬ時期にきているのではないのでしょうか。これから助産施設を持つ場合、色々困難な問題が、例えば施設を作るための資金。嘱託医との関係がうまく行くような援助。助産施設を持っていても現在では収入が不安定。少産。開業場所の問題。後継者の問題等々です。施設が出来ましたらすべてのお

母さんによいお産をして頂くよう努力して、助産婦の役割や必要性を行政や、広く社会に再認識される努力が必要だと思えます。

## 会員の著作の紹介

河本令子著『長崎の看護教育のあゆみ』

定価 四三〇〇円

発行所 葦書房

810 福岡市中央区赤坂三ー二

Ⅱ〇九二一七六一ー二八九五

振替 福岡一ー三九四三〇

(次頁参照)

高岡スミ子著『流れのままに

一看護婦のあゆみ』(私家版)

領価 一一〇〇円

910-02 福岡県坂井郡丸岡町山崎三ヶ

一六一二 高岡方

## 第七回日本看護

## 歴史学会に出席して

河本 令子

(長崎市・会員)

この頃、退官を間近にしている  
せいか看護の歴史探求に興味を覚  
えるようになってきた。自分自身  
の職業生活の証としての歴史も  
さることながら、二〇世紀に看護  
の先人や仲間たちが看護の確立の  
ために努力した道程を残したいと  
いう思いがある。

何かをまとめたいたいという思いも  
あって入会させていただいてから  
三年目に、漸く第七回日本看護歴  
史学会に出席することができた。

特に今回は、医制一二〇年の記  
念すべき年である。

高橋みや子氏の「医制公布以後  
の産婆制度成立過程について」の  
記念講演は、関心のある分野であ  
った。氏のご講演を聞きながら、  
医制一二〇年を記念して、明治三  
二年産婆規則制定までの四七都道  
府県の産婆に関する地方行政をま  
とめることはできないだろうか、  
各都道府県の代表者の努力があれ  
ばできるのではないだろうかと思  
ったりした。

また、大林道子先生の講演「お  
産の変遷を調査して―その方法論  
を考える」、海溪昇先生の講演  
「緒方洪庵と適塾」も興味深く学  
問的な刺激を受けた。それぞれ個  
人的な講演の内容であったが、  
三人の先生方に共通していること  
は、学問に対する真摯な取り組み  
であり、歴史探求をする際の熱意  
行動力、関心の持ち方などを教え  
られた。

さらに、研究発表会、分科会、  
サンドイッチパーティなど大会の  
運営もこれまでの学会出席では経  
験したことのないような、暖かい  
配慮のあるものであった。

とにかく、自由に発表できる雰  
囲気が嬉しかった。

今回、初めての出席であったが  
学ぶことが多く、これからも可能  
な限り参加したいと思った。

最後に、余談になるが、一昨年  
出版した拙著「長崎の看護教育の  
あゆみ」をまとめるにあたり、  
亀山美知子氏のご著書から多くの  
ものを引用させていただいた。氏  
にお目にかかれたのも収穫の一つ  
である。

## 参加者の声



参加者の熱気に包まれた第7回大会会場風景( '93. 8. 28 )

## 参加し続ける

## ことの意味

伊賀 重子

(蒲郡市・会員)

毎年大会が近づくと今年はどうなお話が聞かれるだろうかという期待と、一年間の自分の成果の少なさを省みて後めたさを感じています。

恥かしいと思いつつ毎回出席している看護歴史学会の魅力はと聞かれたら、昔の人の生活を知るための道標が確実に一つずつ増えていく事とお答えするでしょう。多くの資料を提示していただいているのに一つしか自分のものにする事ができませんが、それを土台にして次の年に又一つ積み重ねる恩恵を受けています。

日本看護歴史学会を大切に考えていらっしゃる会員の方々には大変申し訳ありませんが、この会に参加したいと願ったのは温故知新の一語にまとめられるようになりたかった考えではありませんでした。当時在職していた看護学校で看護歴史を担当していたというのが動機でした。あまり純粋なきっかけではありませんので会員の皆様

学者でいらつしやるのに圧倒されて萎縮したり、発表される話題に感動してどうしたら自分が考えている分野の史料が集められるかと思索したり大会の間だけは気持が充実しているという状態でした。回を重ねていくうちに感激している期間が長くなり少し成長したかなと独りで満足しています。

第七回大会のテーマ「産婆制度を考える」で取り上げられた話題では助産活動の根本的な考え方が見えてきて非常に興味深く聞きました。最近救命救急士の資格を考える看護婦が身近に現われて落ちつかない思いをしていたので参考になりそうだと感じています。スロー・テンポですが、皆様方の活動に遅れないよう努力して楽しみながら学んでいきたいと思っています。

このように頼りない会員ですが大きく抱き込んでいただいて運営されている学会であることをご知らせして、看護の歴史に少しでも興味をお持ちの方々が大会に続けて参加されることを願っています。

「産婆」を知らない  
助産婦であっては  
ならない

菅 沼 ひろ子

(東京都・非会員)

今回の医制二二〇年「産婆制度を考える」をテーマとしたこの学会に参加して、痛切に感じたこととして「かつての産婆制度の中で行なわれてきた仕事は、すばらしいものであったにもかかわらず、私たちは何もそのことを知り得ていない」ということがあります。

現在、助産婦としてこの日本に働いている者のうち、どれ程の人が、知っているか疑問ですが、若い助産婦は特に知らない状態なのではないかと思えます。

「知らない」その原因として、関心がないか又は、知る術を持っていないからではないかと思えます。大林氏の書かれた著書「助産婦の戦後」はその意味から、私たちに多くの関心と興味をひき出して下さり、新しく、改めて「知る」ことができたと思えます。氏の仕事は、私たちの為すべき「助産婦の仕事」を、真の姿としてとらえようとされている点が、本当に感謝すべき、うれしいことです。又

助産婦という職業を社会的・歴史的視点からみることの重要性も教えて下さいました。ひたすらに、人々にとつての「お産」を支えてきた、産婆・助産婦にとつて、社会の中に存在し、生きることの重要性を教えて下さっていると思います。

高橋氏の行なわれている研究も私たちにとって「見えなかった」ものを「見えるもの」にして下さっていると感じました。又、私の参加した分科会においても、明治時代の「助産の葉」を研究し、分析されている方々に出会い、又、新しく、知りたいものが「見えるよう」になってきました。

女性の職業として最も古く歴史のある助産婦の仕事に対し、これからの助産婦がもっと自信と誇りをもつためにも、自分たちの職業の正しい歴史を認識すべきだと思います。

国際交流がさかんになり、諸外国の元気のよい助産婦に出会うたびに「日本」を認識させられます。この度のICMカナダでも十分にそれを感じられた方々がおられることと思います。私は神戸のこの会で、助産婦の仲間のすばらしさを確認することができました。今後に期待したいと思えます。

第七回大会を

ふりかえって

大平 政子

医制一三〇年「産婆制度を考ふる」をメインテーマとして、第七回大会が神戸で開かれた。多くの助産婦さんが参加され、会が盛りあがった事はうれしい限りである。

女性問題研究家の大林氏は、講演の中で、開業助産婦とのふれあいを通して得られた助産婦の持つ自然分娩に導く技のすばらしさ、女性達へのプライマリ・ケアの実施等具体的な例を紹介された。反面、現在、優れた技が活かされない医療現場の問題に言及して、その中の助産婦の果すべき役割について提案された。今、必要な事は助産婦が自らの仕事を社会に啓発し、お産の持つ意味を女性達が問えるように働きかけなければいけないという事である。

日本の長い歴史は、女性を男性中心の社会が作り上げた女性像、女性の生き方にあてはめてきた。又、女性自身気づかないまま、それが自分の生き方だと自然に考えてしまうようになった。女性がそのういった生き方、生活観に意識的に目を向け、自己の存在をどう認

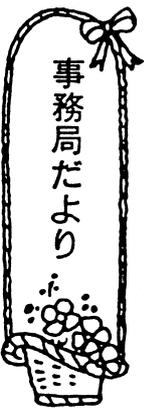
認できるか、これらに対して気づく事の大切さを大林氏は指摘していると思う。

現実の問題はつきつめていけば歴史の中のある事象、現象に結びついていく。逆に歴史をひもとくことで新しい物の見方や視野の広がりができる。今回、そういった事柄に気づく事はできるのであるのだとあらためて痛感した次第である。

会が終って数日過ぎたころ一、二才の子を持つ母親達にお産の様子を聞く機会があった。どの母親も会陰切開を受けた事は覚えていたが、会陰保護をされていたという事はわかっていない。助産婦の優れた技は理解されていないのである。歴史的に培われてきた技術が社会で評価されるためには、私達一人一人がどんな役割を果せばいいのか考えていく事が大切であろう。この大会は短絡思考の私にとって大いに興味がそゝられ、刺激的なものとなった。

一般の人々の参加のもとに、看護の歴史について討論される事ができるならば、違ったおもしろさを得られるかも知れないと勝手な期待をしている今日このごろである。

◆新入会員(敬称略)



- 後藤真澄 509-01 各務原市つつじが丘二一〇五
- 日隈ふみ子 567 茨木市東大田四一五
- 徳川早知子 520-01 大津市一里山三一
- 内藤直子 590-01 堺市庭代台二二一五六
- 日本看護協会看護研修センター図書館 204 清瀬市梅園一三二二三
- 岩脇陽子 602 上京区清和院口寺町
- 東入ル中御霊町四一〇 京都府立
- 医大医療技術短大部
- 中村幸栄 同右
- 坂井敬子 665 宝塚市逆瀬台一一五一一四〇八
- 佐藤幸子 606 左京区一乗寺地藏本町一一二カーサ大石三〇二
- 正田美智子 371 前橋市上沖町三二一三一 群馬県立医療短大
- 工藤ハツヨ 461 名古屋市中区大幸南一一一 20 名大医療技術短大
- 日高文子 891-01 鹿児島市東谷山五
- 柳田恵子 669-13 三田市四ツ辻九三五一一二〇
- 加藤奈智子 852 長崎市坂本一一七

◆住所変更(敬称略)

- 一 長崎大学医療技術短大部
- 柴田静子 371 前橋市総社町総社三一
- 一一一四 エアサイクルハイッ
- 二〇二
- 千浦淑子 673 明石市和坂一一一三
- 生瀬第一ビル五〇三
- 佐藤ヨリコ 160 新宿区若葉三一三
- 山田マンション五〇三
- 穠村郁代 755 宇部市小串一一四四
- 山口大学医療技術短大部

◆住所変更(敬称略)

- 近藤麻里 160 大田区千束二一三〇
- 一〇 富田荘一〇二へ
- 佐山光子 新潟大学医療技術短大部
- 加納尚美 聖路加看護大学へ
- 滝沢道子 192 八王寺市大和田町七
- 一一一六 都立松沢病院勤務)
- 濱中喜代 214 川崎市多摩区菅山谷
- 三一四一六 182 調布市国領町八
- 一三一 慈恵会医科大学看護学
- 科勤務)
- ◆再入会 豊田淑恵 (87-149)
- ◆退会 中嶋祥子 (92-002)
- 山田こずえ (87-031)

※異動事項は必ず事務局へ!

(一頁より)としたいものである。幸い、これまでの白衣の天使や、近年の3Kにつながるイメージから、科学的根拠に基づく専門職としてのイメージに転換することを願って、看護学生が弁論大会を開催することが報じられている(朝日新聞、1993. 9. 26)。

近年の看護をめぐる情勢変化は急激で、かつ大変革ともいえ、対応は甚だ困難である。しかし、すでに若い人の中に改革への萌芽が見られることは嬉しいことである。

**看護史一口メモ ⑤**

前回紹介した「日本一若い産婆」村田阿栗子(16)よりもさらに若い産婆の誕生は、明治二四年に京都府の産婆試験に合格した松村さき(13)であった。松村の場合は医制に基づく試験ということになる。

産婆の留学第一号は、明治一九年一〇月三日に出発した尾池よね(25)である。尾池は浅草区にあった東京産婆学校の幹事であり、群馬県下南勢田郡津村弥一郎の次女だった。一〇月一日には神田の開花亭で送別会が挙行され、尾池はオーケランドでの産婆学研究に勇躍臨んだものである。

(か)

**日本看護歴史学会誌投稿規程**

- 一、論文原稿は未発表のものに限る。
  - 二、原稿用紙は原則としてB5判四百字詰縦書きを用いる。
  - 三、編集委員会において、特に枚数を指定するもの以外の論文原稿は、原稿用紙五〇枚以内とする。図版、写真などは一葉を原稿用紙一枚分とみなす。
  - 四、論文原稿には必ず原稿用紙一ないし二枚の要約を添付する。
  - 五、原稿には表紙を付し、表題、英文表題、著者名、所属機関名、連絡先を表記し、編集委員会事務局宛に送付する。
  - 六、特に編集委員会が必要と認める場合には、掲載料を徴収することがある。
- ◆『日本看護歴史学会誌』第七号の投稿〆切日は本年一二月二〇日です。奮って御応募下さい。原稿の送付先は、今回に限り、本会報発行担当の玄田・岡山宛若しくは本会事務局亀山宛に願います。

50度数 販売価格 1枚 800円



**◆産婆二二〇年記念テレカ**

前号でお知らせしたとおり、医制発布(明治七年八月一八日)中、五〇〇五二条に産婆に関する条項があることから、本会ではこれを記念して写真のようなオリジナルテレカの発売を開始しました。テレカに使用した図は明治初期の郵便報知新聞の錦絵(日本医学文化保存会蔵)です。

看護・医療界に限らず広く一般の方々へのPRにお役立て下さい。お問い合わせ、お申し込みは、下記の事務局までおハガキで。

◆本会発行の『看護婦百年のあゆみ記念アルバム』(頒価七〇〇円)残部僅少。御注文はお早目に!

**編集後記**

第七回大会の会場を予約したときの不安は見事に一蹴された。大会場は助産婦の溢れんばかりの熱気に包まれた。看護職の中でも最も長い歴史をもつ産婆。今こそ、その力をコミュニティ作りに発揮してもらいたいものだ。(か)

日本看護歴史学会会報 第一六号 (頒価 三〇〇円)
発行責任者
602 京都市上京区清和院口寺町東入ル中御霊町四一〇
京都府立医大医療技術短期大学部
編集責任者 玄田公子・岡山寧子
日本看護歴史学会事務局
615 京都市右京区西院月双町一一一 一三〇九 亀山方